文学の杜

仙台文学館友の会会報

第54号
平成29年7月30日発行

仙台文学館友の会（仙台文学館内）
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話　022（271）3020
仙台文学館のホームページ
http://www.sendai-lit.jp/

平成29年度 文学館友の会 総会

文学館の活性化に向けて

連休最終日の5月7日、平成29年度の仙台文学館友の会総会が、文学館で開かれた。

総会は友の会事務局の伊藤美菜子さんが司会、会長の渡辺祥子さんが挨拶をして議長に就き議事に入った。28年度事業報告と収支決算報告、監査報告がなされいずれも承認された。続いて29年度事業計画案と予算案が示され原案通り承認された。

事業計画では、7月の施設見学会を花巻市の「高村山荘」他として、賢治に注目が集まりがちな花巻を、別な面から見学したいという主旨が語られた。最後に役員、サポーターの紹介があり、次の顔ぶれで友の会運営にあたることとなった。

▽会長　渡辺祥子▽副会長　寺嶋信▽幹事　一文字ひろみ、尾形光子▽監事　近田裕子、長沼和子▽サポーター　大久保ひろみ、坂田久子、佐藤満子、佐野のぶ

議事終了後自由な話し合いに移る。自己紹介の後、文学館との個人的な関わりから、友の会活性化にむけた具体的な提案まで様々な発言がされた。共催事業の年賀状展にもっと多くの作品を集める工夫が出来ないか。仕事をしている出席者からは、働く人や若者に向けた企画の要望が出された。文学館は貴重な資料保存の役割もしているとの発言もあった。文学館の自然環境のよさを称賛する声が複数あがった。

歌を披露した出席者もいて、和やかな総会だった。出席者16名。総会後は、学芸員から、開催中の「イラストレーター安西水丸展」の解説を聴いた。

育まれていくもの

会長　渡辺　祥子

新年度をこうして皆様と元気に迎えられましたこと、嬉しく思います。

毎年総会は、桜が終わり、文学館の周囲の緑が力強く輝き始める時期に開催しておりますが、先日、こんな京都の桜守の方のお話を聞きました。

桜は、天候に恵まれ一気に花開いた時のものは、どれもみな同じ色や形なのに、天候に恵まれず冷える日があるなど、時間をかけて少しずつ花開いた時のものは、ひとつひとつが個性的なのだそうです。

私など素人の目にはどれも同じに見えてしまいますが、実は違うのですね。もしかしたら、文学に親しんで育つ花も、同じようなものではないでしょうか。時間をかけて育まれていくもの…。そんな豊かな情緒を、今年も皆さんと共有して行けたらと思います。

友の会を通して、皆さんの心の花が、今年も皆さんらしく綺麗な花を咲かせますように、心を込めて活動して参ります。どうぞ宜しくお願い致します。

文友一滴

大湯環状列石を見学してきました。秋田県角館市十和田大湯字万座、帰路は欲張って田沢湖経由、日帰りは少しきつかったけれど、刺激いっぱいの旅でした。

環状列石は、これまでの発掘調査から集団墓だとされています。大湯環状列石は、野中堂環状列石と万座環状列石を中心とした縄文時代後期（約4000年前から5500年間）の大規模な遺跡です。万座の方が大きくて直径46メートル、現在発見されている日本の環状列石の中で最大のストーンサークルだそうです。二つに使われている石の総数は5～6000個、外帯・内帯の二重の環と日時計状組石で構成されています。日時計状組石は外帯と内帯の間に置かれ、それぞれ環の中心からみて北西に位置します。そして二つの環状列石と日時計は直線上に並んでいて、夏至の日没の方角を指しています。

縄文の人達が500年かけて並べた石、それがそのまま目の前にあるのです。特に印象的だったのは石の置かれ方でした。

子供が石っころで輪を作る感じではないのです。使われている石のほとんどは石英閃緑玢岩という石で、わざわざ離れた河原から運んできたものです。十数個から数十個の石がひとかたまりを作り（配石）、それが環を作っています。それぞれの配石の下には、全て確認されているわけではないけれど、穴があるのです。そして、今ねている石は、立っている石が倒れたのではなく、ねたまま置かれていたことが判っているそうです。

大湯の縄文人は、特別な石を500年ものあいだ運び続けました。そして意識的に配置しました。その間に、土器は用途ごとに作られるようになり、落とし穴の作り方も改良されました。でも、石は同じように運ばれ続け、世代を超えて環は完成されたのです。石を組み合わせ、ある種の祀りを行い、日時計状組石を作った人々、彼らはどこにいったのでしょう。（和）

私と郷土と文学 ⑫

太宰治著「津軽」に、津軽に降る七つの雪の記述がある。そのひとつが「こな雪」（「こな」は平仮名で記されている）である。

青森県初の芥川賞作家三浦哲郎の受賞作「忍ぶ川」は自伝的小説といわれているが、本文に「粉雪」が登場する。主人公が東京下町の料亭「忍ぶ川」に勤める志乃を連れ、大晦日の夜、上野駅から夜行列車に乗り故郷に向かう。そして駅に降り立つ。

「ふるさとは、さらさらとした粉雪であった。……それが油をひいてつやつやとした志乃の髪へ、銀粉のようにふりかかった」

東京生まれの志乃の美しさが読み手のこころを洗うかのように、みずみずしい雪国ならではの情緒を誘う。

若いころ、弘前で暮らしたことのある私はといえば雪の風流を楽しむどころではなく、よく「雪さえなければ…」との思いを抱いたものだった。雪に囲まれた暮らしに思いをめぐらすようになるのは、人生行路も半ばに差しかかったころからである。

北海道へ転勤したとき、地元の人から「雪の深さは人情の深さに比例している」と聞いた覚えがある。ピンとこない人がいるかも知れないが、支え合い、助け合いながら自分たちの暮らしを健気に守る雪国の人なればこその感性がにじみ出ている言葉だと思う。ふと思い出すのは半世紀以上も前に書かれた無着成恭著「やまびこ学校」の中の詩

北国の雪

雪がコンコンと降る。人間はその下で暮らしているのです。
音もなく降りしきる雪の情景が眼に浮かぶようである。（其田敏美）

「私と郷土と文学」の原稿募集
約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

文友の部屋

✽源氏物語を瀬戸内寂聴の訳で読み返している。作者紫式部は、登場人物の男女の心によくまあここまで分け入り、推察し、なりきっていることかと、あらためて驚かされる。女の元に行く時の正妻への気遣いや、若者を官位に付ける時の深い思慮など、硬軟併せた心理描写に、笑ったり感心したりしながら楽しんでいる。（A・B）

✽ジャンケンを「いし・けん・ぎ」と言っていました。仙台育ちの友人に聞いてみました。「ジャンケンポン」と言っていたそうです。「最初はグー、ジャンケンポン」は最近？のことですよね。ちなみに私は東六小学校卒業です。（K）

「文友の部屋」の原稿募集

150字程度で、会員のみなさまの声をお寄せください。おススメの文芸作品や、映画・演劇などを見た感想などジャンルは問いません。イニシャルでの投稿も可です。

風と歩こう ③

文学館の下を流れる水辺が好きだ。そこには特別な風が吹いているから。

花好きの友人とはじめて庭を散策したときのことを覚えている。テラスから外に出た。草花に見入って立ち止まり、なかなか進まない友人をよそに、私は先に歩いた。小さな円形舞台のような所を過ぎ、水辺に近づくと、建物の陰のせいで、真夏なのにひんやりした風が吹いていた。足元を見ると、遊歩道との縁に群生する低い植物に「タマリユウ」と書かれた小さい札が立っていた。我が家の庭にもあるラン科の植物の名前をこのとき知った。

流れの中ほどに渡り石を見たときは、わくわくした。子供のころ、絵本で「ぴょんぴょん橋」の言葉を知り、とても気に入っていたことを思い出した。これは渡るしかない。足をのせる石選びと体のバランスをとるのがけっこう難しい。ふらつきながら渡っている私を、一羽のセキレイが、少し離れた渡り石から首をかしげて不思議そうに見ていた。

後日、館内のオープンスペースの円筒ガラス窓から見下ろした景色が、同じ水辺であることを、最初私は気がつかなかった。それほど丸く縁どられた景色は新鮮で違った印象を与えた。すぐにあの水辺だと納得したのだが、視覚のトリックにかけられたような愉快さを味わいながら、設計建築はアートなのだと思った。（近）

Photo by Ryuji Sasaki

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第54号をお届けします。

▽ことばの祭典の裏方を手伝った。4～5時間でやってのける企画運営にいつもながら感心しきり。短歌、俳句、川柳それぞれの用紙に書き上げる。もちろん好きな分野だけでも良し。お祭りなんだから全部出すよと活気が伝わる。出された作品が全部拡大されて張り出され投票、集計結果のあじさい賞は楽しい。（一）

▽去年庭に咲いた山野草が数種、今年は時期になっても姿を見せない。やっつけ仕事で済ませた草取りのとき、雑草共々ひっこぬいてしまったらしいと判明するにつけ、我が作業のずさんさを思い知る。手元に心を配り、目の前に見えていない未来を想定するということが、何事につけ大切だと反省しきりのこの頃である。（近）

▽アカシアの花が満開になる頃、屋上ビアガーデンがニュースの種になる。桐、朴ノ木、百合の木の花が咲く。紫色の桐の花房はツンとすまして香る。朴ノ木は、人目をはばかり、葉の上に鎮座して優雅に香る。百合の木の花は人見知り、蜜蜂にだけに香りで知らせる。卯の花は目の高さで満開になる。そして、ついに梅雨入り、花々は雨の重さを受け止めている。（和）

▽50歳年下の女性と話をしていた時のこと。「あと50年経った時に、この同じ話題でまたお話したいですね。わたしの考え方はどうなっているでしょうか」と彼女が言う。そんなことが実現できたらどんなにうれしいことか！　わたしの考えだってどうなっているかわからない。でもそのためには、125歳まで生きていなくては…。（佐）

友の会随想

「ミニ合唱コンサート」に参加して

友の会会員　豊島　光喜

わが「いずみオッチェンコール」の指揮者であります大泉勉先生が、第一高等学校時代から井上ひさし氏の友人であったことの縁で、彼が作詞した校歌などの楽曲を合唱するコンサートに、私も一員として参加させていただき楽しい時間をすごさせていただきました。

特に、釜石小学校校歌の「息あるうちはいきいき生きる」の詩とリズムは、いつまでも心に残り、校歌にしておくにはもったいない詩ではないかと思っております。もちろん、校歌としての趣はありすばらしい内容です。詩の中に「釜石小」の言葉がないため、震災にあった方々の心強い励ましの歌にも聞こえてきて勇気が湧いてきました。

この度の震災では、釜石市の中心部が跡形もなく破壊されました。震災後、三陸海岸の街を訪ねたのですが、あまりにも全戸跡形もなく消え失せている街跡には、ことばでは言い表せない悲惨さを見せつけられました。ここに家屋が密集し、大きな街並みを形成していたとは思えない現状に、呆然としました。

「困ったときは　手を出して　ともだちの手を　しっかりつかむ　手と手をつないで　しっかり生きる」まさに、単調なリズムだからこそ、聞く人の心に響いてきます。彼の明るくて楽しい思いが声となって聞こえてきます。

仙台文学館のイベントも折につけ見学させていただいています。文学の全国的な情報が見られるのはありがたく思っています。井上ひさし氏については、たいへん恥ずかしいのですが、仙台に関係していることも知りませんでした。最近、文学館を利用させていただき、いくつかの展示を見て深い関係があることが分かりました。

60年以上も前に小学校を卒業したわがオッチェンの仲間も、子供たちの歌声に負けず劣らず元気をいただき、これからも「いきいき生きていきたい」と思います。

無事に歌い上げた心地よさはまた格別であります。

第30回読書会

特異な生活から見えてくる現代人の実相

山田詠美『ベッドタイムアイズ』

2名の新会員を迎えての読書会は、これまでにない作品との出会いとなった。目が合ってすぐに黒人のスプーンと恋に落ちたクラブのジャズシンガー、キム。脱走兵という問題を抱えたこの男との生活は、言葉ではなくめくるめくセックスが会話となる。

赤裸々な男女関係の表現やストーリー展開に、「おっ」と思ったとの第一声が聞かれ、「ポルノ小説ではないか。何度読んでもわからない内容。一生読まなくても良い小説」などの感想が出された。

一方、バブル経済真っ只中の日本で、既成の概念を取り払うという非情な目を持った作者が、人間を時代の中で描いていると評価する声や、セックス場面が多く描かれているが、現代の人間関係や孤独に迫ろうとしたのではないかとの見方もあった。

山田詠美は二十代で発表したこのデビュー作で芥川賞候補となり、その後、直木賞・女流文学賞・野間文芸賞・川端康成賞など様々な賞を得る作品を発表している。

文体について、「リズミカル。音楽を聴くよう。ピチピチしている。乾いた感覚」など共通した感想が出されたのが、印象的だった。4月12日、11名出席。（佐）

第31回読書会

老作家と若い娼婦の愛の行方は

永井荷風『濹東綺譚』

作家大江は、書きかけの小説の構想を練るために街を歩き回っている。急な雨に遭って開いた彼の傘に飛び込んで来たのは、若く美しいお雪だった。

自らを明かさず、身をやつして私娼街玉の井に通い続ける小説家と、彼を受け入れる気立ての良い娼婦お雪との間に続けられる関係は、本当の愛か否か。読み手の判断は…。

「純真なお雪に対して、お金も地位もある大江は不実で偽善的。二人の間には絶対的な距離感がある。単なるお遊び。本気ではない嫌な男だ」と大江に対する辛辣な感想が多かったが、大江は本気だったのではないかとの意見もあり、それぞれの読み方の違いを感じる。お雪を『雪国』の駒子と重ねて読んだという人が居たり、荷風の日記『断腸亭日乗』と併せて読むことを勧める人が居たりして、膨らみを感じる会だった。

緻密で情感のある描写がみごとで、昭和初期の東京の雰囲気や玉の井に暮らす人々の様子などが彷彿とする作品だった。6月14日、新会員2名を迎えて12名出席。（佐）

◇　◇　◇

次回読書会は10月11日㈬14時

水上勉「越前竹人形」（新潮文庫、中公文庫）

※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。

施設見学会

花巻の風とゆかりの人

「花巻新渡戸記念館」と「高村光太郎記念館」

「今日の日を乙な旅にしたい」と渡辺祥子会長の挨拶があり、7月5日、東北道をまっしぐら雨上りの花巻新渡戸記念館に到着した。

この記念館は新渡戸家ゆかりの地整備事業として設立された。新渡戸家に生を受けた新渡戸稲造の足跡、生涯をみて皆さん感心することしきりだった。「願はくはわれ太平洋の橋とならん」と語り、世界平和につくした国際人であり、ユネスコの創設に尽力した。日本の伝統文化の中の道徳を世界に紹介する「武士道」を著したりもした。ある方はお孫さんから「新渡戸稲造ってどんな人」って聞かれて「答えられなかったが帰ったらしっかり教えてあげる」と話しておられた。

昼食は金婚亭、鹿踊りで歓迎された。おいしくいただいてから土産のコーナーへ。金婚漬、銀婚漬、新婚漬とあるではないか。間違った振りして新婚漬を買ったと舌を出していた人がいた。

次の見学場所は高村山荘と高村光太郎記念館だ。智恵子展望台へは遊歩道が整備され歩きやすかった。下の詩碑から10分ほどで着いた。この丘は南の方角に開けており「遠く霞んでいるのは金華山沖でしょう」と詩「案内」に詠まれていた。光太郎はここで智恵子の名前を叫んだりしたという。誰かが私も叫ばれてみたいといって笑いを誘っていた。そよ風なのに赤松のてっぺんのみが大きく揺れ、松籟は自然を歌い続けているようで神秘的。下ってきて詩碑「雪白く積めり」を会員の方が朗読、皆で聞き入った。

そこから高村山荘へ。落ちている長い栗の花を踏みしめながら土の感触、足裏の感触久々、アオガエルが2匹道端を飛び跳ねていたのにも顔が緩む。タイサンボクの松かさ状のシベに驚いたり。山荘入口には草野心平揮毫「無得殿」の額がかかげられていた。

記念館では彫刻や書をみたり、詩「レモン哀歌」「道程」などの朗読を、映像を見ながら聴くことができた。

帰りのバスの中で渡辺会長は「賢治を巡らないゆったり花巻の旅いいものでした」と。一同で頷き、大きな拍手で終了した。（一）

高村光太郎記念館前での記念撮影

第20回 ことばの祭典

仙台文学館主催の、第20回「ことばの祭典―短歌・俳句・川柳へのいざない―」が6月24日開かれた。

応募作品数は、短歌部門95点、俳句部門98点、川柳部門89点が寄せられた。吟行会の課題は「耳」または「遊ぶ」。

賞はことばの祭典賞、選者の特選・秀逸・佳作、参加者が選ぶあじさい賞。小池光館長賞。

《ことばの祭典賞》

◇短歌の部

三陸の海おだやかで耳鳴りのような記憶をまた持て余す　佐藤涼子

◇俳句の部

夏蝶は砂浜の耳萬の声　小田島渚

◇川柳の部

軽やかに着メロ今朝をリードする　木田比呂朗

《小池光館長賞》

◇短歌の部

若き日の父の遊びし日光の赤き神橋我も渡らむ　加藤鈴枝

◇俳句の部

木耳の嫌いなあなた好きでいる　髙橋道子

◇川柳の部

高安の胸板耳ももじゃもじゃ毛　上田由美子

特選、秀逸、佳作、あじさい賞の受賞者は次の人たち。

〔短歌の部〕▽**斉藤梢選**（特選）林静江（秀逸）大森美南、畠山昭二（佳作）樋野菜々子、佐藤啓子、松本雄治、佐藤鞠、髙橋優理恵▽**佐藤通雅選**（特選）三浦真弓（秀逸）國分郁子、海老塚忠（佳作）菅野實、石垣弘子、黒田鐵雄、小野寺寿子、菊地夏緒▽（あじさい賞）三浦真弓

〔俳句の部〕▽**髙柳克弘選**（特選）徳田ひろ子（秀逸）鎌倉道彦、髙橋道子（佳作）朝倉雅文、日野光雄、畠山みな子、樋野菜々子、平山北舟▽**高野ムツオ選**（特選）内山かおる（秀逸）渡辺進、黒河内玉枝（佳作）朝倉雅文、林静江、真田義子、坂内佳禰、牧野一男▽（あじさい賞）月波与生

〔川柳の部〕▽**伊藤豊志選**（特選）島松柏（秀逸）仁多見千絵、熊谷岳朗（佳作）樋野菜々子、加藤鈴枝、佐藤鞠、三浦幸司、朝倉雅文▽**雫石隆子選**（特選）仁多見千絵（秀逸）渡辺進、寺嶋昭士（佳作）千田康司、穂積貞吉、三浦真弓、日野菜々子、小田島渚▽（あじさい賞）寺嶋昭士

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今年は、第20回という節目の年を迎え、1階エントランスロビーでは過去の受賞作品展示も開催されました。また、今年も、友の会サポーターが、裏方スタッフとして参加し、受付での短冊配布、あじさい賞用の作品貼り出しなど、一日、文学館職員とともに、イベントの裏側を支えました。